年四回（二月、五月、十一月）發行

東亞經濟研究所
京都帝國大學經濟學部內

東亞經濟論叢

第壹卷　第參號
昭和十六年九月

上海に於ける金融機構……經濟學博士　小島昌太郎
中晩唐時代に於ける燉煌地方佛教寺院の礪磑經營に就きて……文學博士　那波利貞
支那古代經濟史概觀……經濟學士　穗積文雄
支那國家銀行の統制力……經濟學士　德永清行
西歐思想に於ける東洋社會論の意義……經濟學士　島　恭彥
滿洲に於ける特殊會社の再組織問題……經濟學士　山本安次郎
滿洲貿易構成の變化……經濟學士　岡倉伯士
ハウスホーファーの東亞文化政策……經濟學士　出口勇藏
買辦發生の社會的根據……經濟學士　鈴木總一郎
東亞經濟圈に於ける米生產の發展……經濟學士　大上末廣
北京回教徒の職業……經濟學士　澤崎堅造
支那紡績勞働請負制度の發達……經濟學士　岡部利良

（禁轉載）

書肆　有斐閣　發賣

第一卷　五七八　第三號　五二

支那古代經濟史概觀

穗積文雄

支那の歴史は先秦時代に始まるとせられる。然し先秦時代は後に述ぶるところよりしても容易にうかがひうる如く、すこぶる發達せる時代であり、從てかゝる時代が一朝にして急に成るとは考へられぬ。そこでそこには必ずやそれに先行する相當發達した時代が想定せられねばならぬとせられる。然し、それは所謂先史時代に屬し、その今日存する文獻の如きも後世の創作に出でずんばその粉飾にかかり、傳說、神話の域を出でず、必ずしも信を措き難いとせられるものの如くである。然し輓近考古學の發達、發掘探險の進捗は漸くその時代の片鱗を示すことに成功し、當時の狀態に對して解明の曙光が射し初め、その結果、時に從來所謂傳說、神話と目せられてゐたものが或る程度まで實證せらるるをさへ見るに至つてはこれら文獻の研究解釋も必ずしも拒否すべきでないとせねばなるまい。それでこの支那古代經濟史の概觀はこれら出土物と文獻に關する從來の諸研究の援用に負ふ當時の經濟狀態の素描を以て始まる。

支那は悠遠の昔、黃河の中流南北の地域から開け始めたといはれる。そこは所謂黃土層の平原ではあつたが、當時は樹木密生し、禽獸棲息し、必ずしも惠まれた地帶とはいへないとしても、黃河の汎濫は地味の良好を招來することも思はれるから、治水さへうまく行けば收穫はなか〳〵豐なることが約束せられてゐたと考へてよから

う。

當時、人々は部落に分れて、そして各々の部落は極めて幼稚で、漁獵、採集生活から牧畜や低度の農業への過渡期にあつたであらうと推定せられ、概ね同祖又は同祖信念を紐帶として結合する血緣社會たる氏族共同體で、そこでは、財產の共有はもとより部落一切のことは氏族會議により、連帶行動をとれるものの如く、一旦緩急あれば、全族をあげてこれに赴き、その亡ぶるに當りては亦全族あげてこれに殉じたと推想される。禮記禮運篇に見ゆる大同の社會は勿論後世の理念の產物ではあるが、その、天下を公となし、獨りその親を親とせず、獨りその子を子とせず、貨はその地に棄つるを惡めども必ずしも己に藏めず、力はその身より出でざるを惡めども必ずしも己の爲にせずと言へる如きはまさにこの社會に吻合するといつてもよいであらう。

これら氏族共同體の大いさは今日よりこれを知る由もないが、右のような團結の要請や當時の低い生產力の制約よりすれば最初は比較的小さく、從て澤山のかくの如き小部落が併立してゐたであらう。これが所謂「方」で、老子の道德經の所謂小國寡民の社會はまさにこれに該當するかと思はれるが、然しそれに於ける無欲はもとより、鄰國相望み、雞犬の聲相聞え、民老死に至る迄相往來せずといふのは勿論道德經の作者の主觀でなければなるまい。それは前述の如く共同體ではあるけれども、狩獵、征戰乃至は治水等に於ける必要よりして生ずる指揮者、卽ち首長の登場を見ることとなり、これが所謂「后」であるが、そして傳說によると、これら「后」はその配偶を同族內に求めず、必ずや他の氏族の女と結婚し、所謂族外婚によつてゐたようであり、それは今日支那社會に於ける堅い同族不婚の習俗よりするも肯定せられねばならぬかと思はれ、そしてそのことは、當時の社會が母

系制乃至トーテム制であつたか、少くともそれを經過せるものであつたであらうとの推定をも可能ならしむるに似るが、それと同時に氏族部落間に交通關係の存在せることを示すものともなし得よう。そして氏族部落間の交通には平戰兩面があるであらうが、平和の場合に於ても、締盟、賓服を見ることあり、若しそれ戰爭の場合に至つては、征服併呑を伴ふべく、何れにしても部落の間に比重關係を生じ、强大な部落が一般部落の上に位することになる。この上位の部落の后が「元后」で、その下に併立する部落の首長が「群后」である。

かゝる元后として始めに現はれるのが夏部族の后で、その始祖は卽ち禹であるといはれる。夏は四百餘年にして商の湯によりて代はられるとせられる。商は後に殷に遷つたので又殷と呼ばれる。殷は六百年餘で周に代はられるとせられるのであるが、殷の晩年卽ち、西紀前千二、三百年頃の狀況はその都した跡と傳へられる殷墟が近頃になつて發掘せられ、そこより出土せる遺物によりて我々は比較的確實にこれを推測することができる。

殷墟發見の遺物は石器、骨器、土器、青銅器を始めとして、文字を刻した龜甲、獸骨であり、それによりてこの時代が全く金石併用期から遂に青銅時代に入りつつあつたらしいことを知ることができるが、更に龜甲獸骨に刻した文字といふのは、牛骨、龜甲等に先づ以てそのトはんとする用件の文字を刻記し、その裏面に孔を穿ち、そこを燒いて表面に生じた割れ目を以て卜筮の用に供したもので、從つてそれは支那古代史最古の文獻といふべく、その研究乃至解說の進むにつれて當時の社會經濟狀態が次第に解明せられるわけである。然らばそれは如何にあるであらうか。今暫らく郭沫若氏や內藤博士等の研究によつて*それをうかがへば次の如きものを得るでもあらうか。

* 郭沫若，藤枝丈夫譯，支那古代社會史編，第三編卜辭を通じて見たる古代社會，內藤虎次郎博士，支那上古の社會狀態，（東洋文化史研究所收），白尾陽光氏，卜辭に窺はるゝ殷代の農業に就て。（東亞經濟研究，第二十三卷第四號第五號）

當時に於ける人々の生活は祭祀と狩獵と征伐が主で、その外、牧畜、農業、工藝もある程度存し、そして交換賣買さへ行はれてゐたと考へられる。

祭祀は眼に見えぬ神であるところの鬼を尊ぶもので、それが盛であつたから從て巫がなか〳〵勢力があり、何事でも重大なことには卜筮が行はれたわけであり、そしてその祭祀には犧牲が供へられたものである。

狩獵は弓矢、網羅、陷井により、獲物としては狼、鹿が大部分を占め、さらに野生の馬、羊、猪、象等があつた。狩獵と並んで一の經濟段階を形成するとせられる漁獵は行はれはしたが、狩獵のように盛んではなかつたようである。そしてそれは支那の國柄にもより、又時代の關係もあるとせられる。

征戰が盛んであるのは當時にありてはそれは財物人畜の掠奪を意味し、從て生活資料獲得の一方法として重大な意義を有してゐたのによるかと想像せられる。この場合浮屠は生産力が一定の發展を遂げると殺す代りに奴隷とするに至るのは容易に推測することができよう。

祭祀に犧牲を供し、又食料の爲もあつて、牧畜も行はれる。牧畜は馬、牛、羊、鷄、犬、豚の所謂六畜が既に家畜として存してゐたことが知られる。

卜辭には年の豐凶と言ふことがあるよりすれば農業が行はれてゐたことを推定することができるであらう。ただし、出土品によつて見る農具は石器であつたようではあるが、それでも栽培の方面では圃、囿、果、樹、桑、栗が文字に表はされて居り、耕作の方面では田、疇、禾、嗇、粟、小麥、麥などの文字があるところよりみれば農業が相當重要な位置を占めるに至つてゐたことを推定することができよう。

工藝としては、前述の耕具の外、鼎、卣、盤、壺等の食器、弓矢の如き武器は何れも出土品として吾人の見るを得るところであるが、それらよりするも、既にかなりの程度に發達してゐたことがわかる。そして石器、骨器とともに銅器もあり、金石併用期であつたことを示すが、鐵の用法は未だ知られてゐなかつたようである。又卜辭に絲、帛などの文字があるよりみればおそらく養蠶も當時既に行はれてゐたのであらう。それから建築も宮、室、宅、家等種々の文字があるところを以てみれば、もはや穴居や樹巢の生活ではなくて家屋に進んでゐ、そしてそれも相當の發達をとげてゐたことが知られよう。そしてその住居は、丘陵を選んで居るが、それは水害をさける爲と、狩獵の必要からであつたと思はれる。衣服は皮裘を主とし、又布帛を用ゐたことが知られる。

それから交換貢買が既に或る程度の發達をとげてゐたことは殷墟から石又は骨の種類で小安貝の形を模したものが出てゐることから推定することができる。蓋し、支那では小安貝が貨幣の元祖であるといはれてはゐるが、黃河の中流、海の遠いところでは貝がよほど珍らしく、又美しくて裝飾物として重んぜられ、そして貝がそのように人々から珍重せられたことがやがて貝をして交換の媒介物としての貨幣の役割を果さしめるに至つた所以であり、即ち今日財貨の文字が貝に從ふ所以であるが、然し殷墟からこの貝が出たとだけでは、當時それが裝飾物として用ゐられてゐたのか、貨幣として使用せられたのかは判斷に苦しむところでなければならぬ。然し光澤もなく、從て飾りにもならぬ骨でもつてこの貝の模造品が澤山造られてゐたとなると、それは貨幣として使用せられたものであると判斷してよいのではないかと思はれる。そして殷墟からはこの模造品が出て來たのである。してみるとその當時即ち今から三千年も以前に貨幣が使用せられてゐたと言ふてよいのであらう。そして貨幣が使

用せられてゐるとすれば、そこでは單なる物々交換を超えた賣買が行はれたことが推定せられねばならぬ。但し狩獵、牧畜とともに低度の農業が漸く行はれた當時であるから、自足自給的傾向が強く、從てそれほど盛ではなかつたであらう。

然し交換賣買の發生は私有財產の存在を豫想せしめ、そして私有財產は財產共有制に背離する。もとより共產制の下に於ても若干の私有財產例へば弓矢とか、裝身具の如きは當然認められてゐたことと思はれはするが、それらは恐らく餘りに私有の必要大であるが故に、それは相續や遺贈などの對象とはなり得ても交換賣買の對象とはなることなく、從て私有財產とは言つてもその私有の感念は極めて稀薄であり、否それは財產といふよりはむしろ身體の延長と考へられたのではないかとさへ推測せられ從てその共產制に對する影響も問題ではないのではないかと考へられる。然し今や交換賣買が行はれると言ふところまでくるとその私有財產は最早や共產制に對して無影響ではあり得ぬ。換言すれば、それは共產制の基礎を動かす第一歩でなければならぬ。

然るに人口增加し、人智が進み、欲望が增大するに從て、人々が狩獵や掠奪の如き不確實な生活資料獲得方法による危險をさけるに及んで農業の重要性は一段と增大し、農業生產力の增大が要望せられ、それはやがて粗放農業より集約農業への推移を結果することになると解せられるが、その爲には土地と人の關係の緊密化が必要となり、そして土地と人との關係の緊密化は土地の私有を導入し、そしてそこに始めて農業生產力の異常なる增進が可能となる。所謂、所有權の魔力は砂礫を變じて黃金とするといはれる所以である。

かくて殷の末期には農業はそこまで進み、從てそれは共產制の上に成り立つ氏族共同體の基礎を動かし、從て

從來の氏族を率ゐる首長の神權的の力に對する懷疑を生ぜしめ、遂に氏族社會の解體を促進することになると思はれる。殷の滅亡の原因として信仰が衰へて來たことが特筆大書せられる所以であらう。

かくて氏族共同體の紀綱が弛るむと世は混亂に陷る。混亂の世に於ては安全を保障するものは武力の外ない。そこで人々は武力にすがることとなる。そしてよらば大樹の蔭といふことになり、それで武力の大なる者は益々强大となり、やがてその間に自然淘汰が行はれ優勝劣敗の過程を經て優勝者が天下を統一する。或は天下風を望んでその下に集るともいへよう。

かくてこの優勝者卽ち君主、言葉を換へていへば天子又は王は天下を有ち、所謂「普天の下王土に非るはなく、卒土の濱王臣に非るはなし」*といふことになる。そこで王は功業に參畫せる創業の臣を犒ふことになるが、かく漸く農業が重要となれる時代に於ては土地が最も重要なる生產手段である故に、これを賜與するが最もよく犒ふであり、ここに封土を受けて諸侯が成立する。そして諸侯は封土を受ける代償として君主に對して忠誠を誓約す所以る。忠誠の義務の中では王命を奉じて兵を出すことが大切であつたのであるが、支那でもそうであつたことは諸侯の國を千乘の國といふ風に、その出し得る兵車の數で呼ぶによつてこれをうかがひうるであらう。勿論この場合、土地を有する者にして自己の安全を得ん爲に自己の土地を提供し改めて君主より封土として受け、臣從忠誠の誓約を爲す場合もあるであらう。所謂本領安堵の場合がそれである。又君主が自己の一族を藩屏として封する場合もある。そして諸侯は亦自己の封土をその家來に分與する。この場合には實際に土地を賜與する場合と、それと同一の効果のある土地の產果卽ち俸祿を給する場合とがある。そして家來は土地を受ける代りにその

* 詩經，小雅，北山。

主人たる諸侯に忠誠を誓ふのである。同様の關係は又その家來と彼の家來との間にも成り立ち得る。

然し土地はそれだけでは價値が少い。土地はそれが開發利用せられてそれから産果が齎らされるから價値があることといふまでもあるまい。それでここに土地といふ場合それは土地を開發利用する人をも包含せしめねばならぬ。そしてかかる人の尤なる者は農夫である。これかかる制度の下に於て爲政者が重農を說きながら、農業人口の維持增殖の爲に農夫は土地に固定し、土地の所有權の移轉に從ひてその主人を變じ、所謂農奴の狀態に置かれる所以である。

そしてこれが謂ふところの封建制度であり、從て封建制度の本質は、主從の間に於ける封土と忠誠の交換關係に於て成立するものであり、土地が一定の重要性を有することを前提とし、從て農業時代に入りての産物であるが、同時にそれは統治の一形式であつて、交通機關の充分に發達せぬ時代に於て血緣社會より地緣社會への過渡期に社會の安寧を確保する爲に要請せられる必然の産物であつて、洋の東西を問はず見られるところである。人或は支那に於ける封建の語が王が諸侯を封ずる時の儀式より出ずるの故を以て支那に於ける封建制度と西歐のヲイダリスムスを同視すべからずとするが如きは、浪速の芦と伊勢の濱萩を同視すべからずとするの類でなければならぬのではあるまいか。

かくの如くして周は殷に代はりて登場し、同姓又は功臣を諸侯に封建するとともに、又從來の群后の多くは本領安堵を得、かくて周室を中心としてその下に諸侯あり、王侯の下には各卿、大夫、士人があり、土地人民を私有することとなる。そして王侯士大夫は土地の所有者で人民は農奴である。農奴は始め被征服民で自由民ではな

く、支配階級よりその土地を受け、その上に生活を營む代りに支配階級の爲に一定の土地を耕作し又力役に服する義務を負ふもので、孟子の有名な井田制は支配階級と農奴のかくの如き關係が理想化せられたものではなからうかと思ふ。

然しそうすると耕作者は農奴で農奴は土地の附屬物であつて土地の所有者ではなく、從つて農業生産力の增大の必要は土地と人との關係の緊密化を要請し、その極限者としての土地の私有化を契機としてやがて殷周革命を招來するとせる先述の論理と背馳するかにみへよう。然し、殷の時代に於ても實際に土地を私有する者は氏族の成員たる貴族で直接に耕作する者は奴隷であつたと考へられ、さすれば土地が支配階級によりて所有せらるることには何等異るところなく、そしてその私有現象が殷代にありては社會の基礎を動搖せしむるものであるのに周代にありてはそれこそが社會の基礎を確立する所以であるといふだけであつて、そこに吾々は時代錯誤の代りに歷史進展の自然の數をみるべきであらう。

もつとも、そういつたからといつて、殷周の更替の政治革命は一朝になるも、氏族社會より、封建社會への推移の社會革命は一夕に運ぶものではなく、それで封建制度もその萠芽は既に殷の社會の內に存してゐたものが周の天下に至りて見事に開花したものであること、丁度秦が天下を統一して封建制を廢して郡縣制を始めたといふも郡縣制はすでにその以前より秦に於て實施せられてゐたのを見る如きものであらう。

さて、周の封建制度の下に在りては如何なる經濟狀態が展開せられたであらうかといふに、この時代の經濟狀態を纏めた最古いものとしては漢書食貨志があり、撰者班固は周室至美の治を謳歌して、その昔を今になすよし

もがなの熱情もて、當時の狀態を說いて詳細を極め、　あかも眼前に彷彿たる思あらしめはするが、惜しいかなそれは儒家創作の傳說を無批判に援用して成れるもので經濟史と言はんよりはむしろユートピアと言ふの適切なるを覺ゆる。といつてその以後になつたものでは不確實の度を增すのみであり、それ以前の記錄では信を措き難いとせられる。それでこの時代はどうも漠として摑みにくいのであるが、然し大體次の如きことはいへるのではなからうか。

卽ちそこに於ては農業が益々發達すべきことは既に見たる殷周革命の歷史よりしてもうなづかるべく、世に周の祖先を堯帝の農官后稷なりとする傳說は周の天下に於て農業が盛大なりしことより生ぜる附會にあらずやとの說もあるが、それでもなほそれは如何に周に於て農業が盛であつたかをうかがはしむるには足る。それから諸侯が封土を受けると所謂城郭を制して處ることになるのであるが、そうすると、彼等は宮廷生活の器具、調度や武器を必要とする故そこに少くとも宮廷工業が芽生えるであらうし、又支配階級の生活の奢侈、欲望の增進は、他境の產物をも欲求せしむることとなり、そこに交換、商業の發展が促進せしめられ、諸國の商人がそこに蝟集しかくてその城下は政治的中心地たるのみでなく漸くにして所謂經濟的中心ともなり、やがて都市へと發展するであらう。そして交換、商業が漸く發展し、交換の媒介物の重要性が增大し、貝貨乃至その模造品の外にむしろ萬人の必需品たる布帛や農具などが物品貨幣として使用せられることが考へ得られる。

かくて周室治下の文物は發展し、爛熟する。少くとも彼等の文化は周圍の部族を遙に凌駕する。そこで彼等は自らを中華と誇號し、周圍の部族を東夷、北狄、南蠻、西戎と蔑視する。この華夷の別の基準としては或は夷狄

の血族結婚が說かれるが、やはり一般文化の優越性の自覺をあぐべきであらう。蓋し、彼等が若し彼等の一般文化が相手方のそれよりも劣等であるとの自覺を抱くとすれば、その時には結婚制度でも却て相手の陋習を慕ふかも知れぬであらうから。然るに文化の發展爛熟は人をして軟弱に陷らしめ勝ちで、從て野蠻未開の族は文化爛熟の族より力に於て勝ぐれるを常とする。從て文化族は野蠻族の侵略を蒙るのがきまりのようである。少くとも、周の社會は先述の如く農業社會であるが、農業社會は定住且、平和的であり、物資が豐で、戰鬪的且移住的で物資の必しも豐ではないところの遊牧族の好箇の侵略の對象となると考へられる。かくて周の天下は夷狄侵入の脅威の下に曝されるべく運命づけられる。然るに封建制度は領土の分割、國力の分散の傾向あり、時代を經る間に王威に服せざる者も現はるべく、これが討伐は兩者の衰落を結果すべく、かくて王道微かにして遂に文天下を糾合して社稷を保持するに困難を感ずるに至ることが生じうるが、周も亦國初以來約三百年にして漸くそのような狀態に陷り、西方よりする犬戎の壓力に堪へかねて都を東の方、洛陽に移すこととなるが、愈加はる夷狄の重壓に對してここに何人か立つて諸侯を糾合し、王室を扶翼して、外、夷狄の災を攘ひ、內、中華の文化を維持する者の出づるを要望することとなるはむしろ當然でなければならぬ。この當然の要望に應じて登場する者が卽ち謂ふところの覇者で、齊、桓、晉文以下五覇交々立ちて所謂春秋時代を展開することとなる。これを春秋と呼ぶは大體その時代が孔子の刪せる史書たる春秋のとり扱へる時代なることはいふまでもあるまい。

春秋時代の經濟狀態も亦甚だ漠然としてゐるが、幸に「詩」があり、「詩」は春秋の末期に出でたる孔子が、周に行はれた歌謠を凡三百五篇に刪せるもので、歌謠は民間に傳唱せられるものなればその性質上比較的原形を

とどめてゐると考へられるから、當時の民情、從て又經濟狀態の比較的眞に近いものが窺がひ得られるとなしえようかと思はれる。もとより「詩」は春秋時代を反映するものが多いことを認めるとしても、なほ春秋以前、卽ち西周時代を反映するもののあることを否定出來ぬであらう。然し春秋以後を含むなら別、以前を含むのは大して差支へあるまいと考へられよう。蓋し春秋以前に到達せる狀態はその以後にももちこされようから。それでは詩を通じて觀たる當時の經濟狀態は如何にあるであらうか。暫らく小島祐馬先生の『詩を通じて觀たる周代の經濟狀態』*に於て說かれるところによれば次の如くである。

詩を通讀して何人も氣付くところの經濟上の顯著なる事實はその時代に於て生產業としては農業が主要なるものであると言ふことである。當時の主要なる穀物は黍稷の二者であつて、稻、粱、菽、麥、麻がこれに次いだであらうといふことが想像される。そしてその種類が既にかくの如く多く且分類がかくの如く細かいと言ふことは、又當時農業が相當に發達してゐたことを物語るものでなければならぬ。蔬菜は瓜や瓞が多く作られたもののごとく、樹木では桃李梅等果樹の名が屢見え、又榛、栗、椅、桐、梓、漆、檀等が樂器その他の器物の材として栽培されたこともうかがはれるが、何と言つても最上位を占むるものは桑である。農具は耜が屢「詩」に見えて居り、又時として錢鎛鉦などの名も見え、箕や臼の使用されたことも想像され、家畜は牛羊馬雞などの名が散見して居り、牛羊は主に食料に用ひられ、その中でも牛はたまに運搬に用ひられ、馬は專ら運搬に使はれるのみである。そして耕作方法は耦耕と言つて二人相並んで共耕するのが一般の風習であつたようである。

漁獵は行はれはしたが農業ほど主要なものではなく、支配階級の娛樂として、又は儀禮として行はるることが

* 支那學第三卷，第七號，第八號。

多かつたようである。

牧畜は農家の副業として各家若干の家畜を飼養せることは想像に難くないが、多く天子諸侯の經營するところで農業ほどの重要性は認め難い。

工業は道具の製造は餘程發達せるものの如く種々の精巧なものが盛に行はれ、農耕佃漁の道具や、武器から禮器樂器の如きに至るまでその種類もおびただしく、その材料も貴く金屬、陶土、玉、石、角、木竹等に及ぶ。又建築の如きも天子諸侯の宮室はその結構堂々たるものの如く、衣服は絹麻毛皮等にて作り諸種の樣式あり、その他裝身具も種々佳麗なるものが用ゐられてゐる。然し「詩」によれば衣食住に關する簡單なものは農民自身の仕事であつたことを證しうるも、一般の進んだ工業がどの程度まで民業として行はれてゐたかは推知できぬ。恐らくは、宮廷工業として成立せるものであらう。

商業はなほ微々たるもので物々交換が行はれて居り、その中から布帛の如きが物品貨幣として成立し、又鏹や刀の如きも物品貨幣を形成してゐたかと想像せられるが、鑄造貨幣の行はれた事實を立證するに足る材料は全くこれを缺き、ただ貝貨の行はれたるを知るのみである。それで次の戰國時代に於ける如く商人が巨富を擁して貧富の懸隔大なるが如き弊は未だ現はれなかつたようであるが、治者たる支配階級の搾取に對する怨望はよく見られるところである。

春秋時代に於て五覇は尊王攘夷を口號として立つたとは言へ、彼等の本心は自己の勢力扶植にあつたことは爭へぬところで、孟子が、「春秋に義戰なし*」と慨せられたる所以である。されば春秋の末期嘗て夷狄と目されたる

* 盡心章句，下。

秦楚の如きが、却て覇を中原に唱へるに及んで最早や華夷の對立は無意義となり、中夏の傳統擁護といふことも問題でならなくなると、やがて周室の扶翼といふが如きことは顧慮せられなくなり、これより、下剋上の風潮しきりにして諸侯自ら王を稱し、互に權を張り、威を競ひ、攻伐これ事とし、弱肉强食遂に所謂戰國七雄の抗爭對立の時代に入る。これを戰國時代と呼ぶはこの時代の歷史があだかも戰國策に記せられ居るより來ることは改めて說くべく餘りに有名である。

かくて戰國の世は道義地を掃ひて空しく、秩序は紊亂し、七雄或は合從し、或は連衡し、干戈動き兵馬連りて解けず、都市は荒廢し、財貨は破碎し、民衆は塗炭の苦を嘗め、亂離混沌の暗黑社會を現出すると考へられがちのようである。そしてそれも確に眞實である。春秋の末期より戰國にかけて社會が暗に面せるは否み難いところである。然しそれは事象の一面に過ぎぬ。事象の他の一面を見れば舊秩序の廢墟には新體制の萌芽が生じ、一般の繁榮は必ずしも衰へず、經濟は發達し、文化は圓熟し、思想界の如きは空前絕後の發展を遂げ、光に面してゐるといふことができるようである。

蓋し列國互に對立して抗爭するときはその本を養はねばならぬことになり、ここに各國富國强兵策を競ふこととなる。富國策は農業が最主要なる生產業であるところに於ては先づ重農策となるは當然である。かくて農業を重んじ、農業生產力を增進せしむることが考慮せられ、或は灌漑用水の法が進み、又は耕作方法に於て從來の耦耕に代はりて牛犁を使用することが行はれたりすることゝなり生產力の增進を見るとともに地力を盡くすことが强調せられ、そしてその爲には結局耕作者が土地を所有するか、少くとも所有すると同樣な効果をもたらす關係

に立つことが要請せられることとなるが、それは奴隷の解放を意味すべく、ここに土地所有權は支配階級の手より農民階級の手に移ることになるのであつて、史乘に名高い商鞅の所謂井田を廢して阡陌を聞くといふのも實はこの事象の法的確認の宣言であると解せられる。かくて農業の生産方法は一段と飛躍する筈であるが、豪强の兼併がこれを阻害することを忘れるわけにはゆかぬ。

勿論、自由民が自己の土地に於て生産を營むとなれば領主の土地を農奴が耕作してその收穫をとる助法は成り立たぬ。そこでそれに代はりて民の收穫せる穀物の一部を領主に提供せしむることとなる。これが租稅で、租稅の字を分解すれば穀物を分つとなる所以である。然るにその領主に提供する穀物の一部たるやどんどん增大することが可能で、殊に干戈動いて止まざる戰國の世軍資金の必要はその一部分を大部分に增し、のみならず、それを他のものにまで擴大して、山澤の稅、江海陂の稅、市井の稅等がでて來、所謂苛斂誅求に陷り勝ちである。又戰爭はただに軍資金のみでなく直接人力をも要求する。それで力役から進んで兵役を課することとなるが、戰爭技術の發達はやがてこれを特定人に限り、ここに專門の兵士を常置することになり、一般人はその義務より解放せられる代りに貨幣を納めしめられる。これが賦で、その貨幣を表象する貝と武より成る所以である。然し軍國費用多端につれて賦を納めても更に兵役が課せられ、その兵役が賦に變形され、然る後又兵役が課せられるといふ同一過程が繰り返へされ、民の賦課は重る一方である。そして賦は當然人頭稅であるが、收入增大の必要はやがてこれを財產稅と同樣に扱ひ、資產に應じて徵收することとなる。のみならず賦も亦算賦、更賦、口賦と種類が增す。かくて苛斂誅求は民の生活を窮迫に陷れ、民は所謂恒產なくして恒心なく、放辟邪侈爲さざるなきに至

り、そのことは社會を闇に面せしむる所以でなければならぬことに眼を蔽ふてはならないが、だからと言つてわれわれはそこに自由民の擡頭、農業生産力の增進が社會進展の一齣であることを無視するわけにも行かぬ。

又周初の群小諸侯が併吞せられて七國となるのであるから、七國はとにかく大國でなければならぬ。從てその諸侯の生活は豪奢となり、上の好むところ下これに習ひ、かくて欲望の質量的增大に伴ひてこれに應じて商工業が發達すべく、商工業の發達は又欲望を刺戟してこれを增大せしめ、互に因となり果となつて窮まるところを知らざるべく、かくて工業に於ては、宮廷生活は裝飾品調度器具等の發達を促し、就中、武器の發達を來し、特にこの頃より漸く鐵の使用が盛となる。そもそも鐵の古文字は銕で、夷狄の用ふる金の義で、從てそれは西方より傳來せるものと考へられるが、史記貨殖列傳を繙くとこの頃、蜀の卓氏や宛の孔氏や山東の遷虜程鄭等鐵冶を以て富む者が出てゐるのを見る。そして鐵の使用は獨り武器のみでなく農耕の道具の發達を來さしむることは改めて說くまでもないところであらう。

かくてこの時代になると諸侯の居城の地は愈大きな都市となり、商工業の中心を形成し、繁榮を極めること、例へば蘇秦が、「臨淄の塗、車轂擊し、人肩摩す。袵を連ぬれば帷を成し、袂を擧ぐれば幕を成し、汗を揮へば雨となる」* といへるによりても想像ができよう。そしてこれら都市には市場が開設せられ、商人には投機商人も出現する。陶朱公、子贛、白圭の如きがそれで亦何れも巨富を積む。富めば所謂素封で諸侯と分庭抗禮することもでき、勢力を有するに至ることは、例へば魏の文侯は魏の大財閥たる段干木の門を過るに當つては必ず車上に於て會釋して通つたと傳へられ、又司馬遷は、** 孔子がその名を天下に知られるに至つたのも一に富豪の弟子、子贛

* 史記，蘇秦列傳
** 史記，貨殖列傳

が居たればこそであるとさへいつてゐるによりてもこれをうかがふことができよう。以て如何に商業が盛大に赴けるかを知るべきである。そしてかく商業が盛となれば賣買交換の要具たる貨幣も發達するは必然で、ここに始めて金屬貨幣、鑄貨の出現を見ることとなる。刀や鏹を模したる所謂刀布の貨が卽ちそれである。

そしてただ商人が巨富を積める場合と限らず、凡そ戰國の食ふか食はれるかの對立を續けるところでは最早や單なる門地や肩書や、有職故實では用を爲さぬのであつて、物をいふのは實力實効のみで、實力實効さへあれば、布衣より起りて宰相の印綬を帶びることすら稀らしとせず、蘇秦、張儀はその尤なるものである。かくて何人も實力さへあれば立身出世ができ、男子功名富貴手につばきして取るべく、所謂「王侯將相寧有種乎」*の氣風生じ互に競爭するところに異常なる進步發達があり、又それらの人々の出處進退は國境の制限を超越し、客卿互に往來し、所謂「楚材晉用」の風潮を來たし、そのことは、交易商業と相より相たすけて諸國の文化の融合を促進し、かくて一般文化の向上が招來せられる。かくて加へて、かくの如くして生ずる個人尊重、創意の尊重、自由放任自由競爭の傾向は思想言論の自由をもたらし、諸子百家輩出して甲論乙駁誠に空前にして絕後と稱せられる先秦思想界の盛觀を現出することとなる。

かくの如くして春秋の末期より戰國の世にかけて、兵馬倥偬干戈止む時なきにもかかはらず、社會の進步發達は實に目ざましいものがあつたのであるが、然しながら、戰爭には全體主義が一番よいことは昔も今に變らぬと見え、最も法家の敎を奉じ、自由を抑壓して統制を擴大し、個人を弱化して王權を强化し、銳意富國强兵を計りたる秦が遂に六國を併呑して天下を一統するに至りてここに戰國時代の幕が降り、世は秦漢時代に入りて先秦時代は終ることとなる。

* 史記，陳涉世家，